

高等学校における発達障害等の 特別な支援を必要とする生徒へ の指導・支援に関する研究

～授業を中心とした指導・支援の在り方～

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

笹森 洋樹

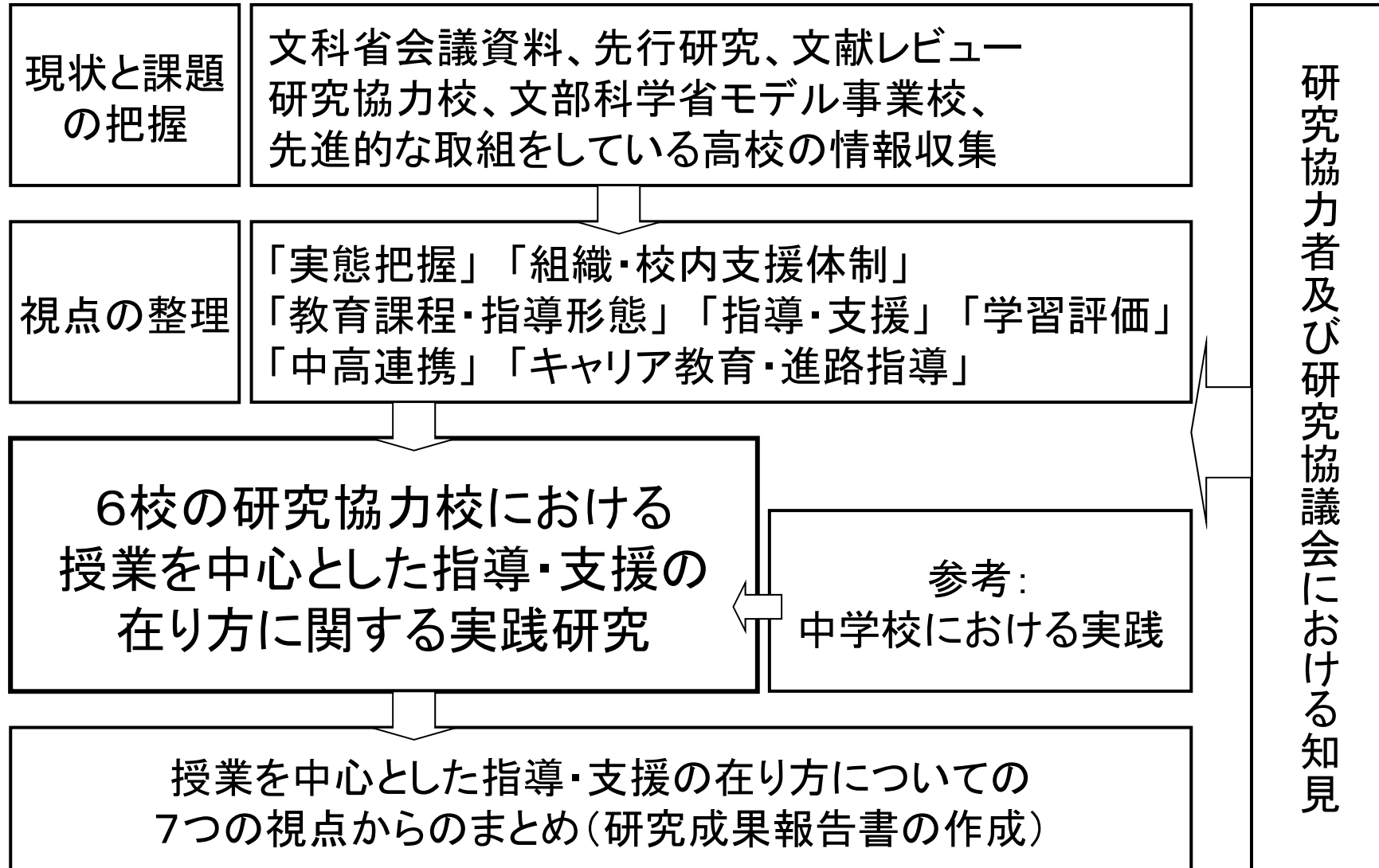


研究の目的

本研究では、高等学校における発達障害等の特別な支援を必要とする生徒の指導・支援の在り方について、研究協力校における実践等を通して検討することを目的とした。

指導・支援を支える上で重要と思われる、「実態把握」、「組織・校内支援体制」、「教育課程・指導形態」、「指導・支援」、「学習評価」、「中高連携」「キャリア教育・進路指導」の視点から、現状と課題を把握し、大切にしたいポイントについてまとめた。

研究の概要



高等学校教育の現状

(H25学校基本調査)

〈全・定〉4,981校 332万人(〈私立〉1,320校 〈中高〉402校)

〈通信〉 222校 18.5万人〈中等〉50校 1.4万人

→中学校卒業者の高等学校等進学率98.4%

→〈全・定〉の大学等進学率53.2%、就職17.0%

→〈通信〉の大学等進学率16.5%、就職15.3%、他41.8%

(H24児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査)

長欠者数 85.883人(2.56%) うち不登校57.664人(1.72%)

中途退学51,780人(1.5%) 中途退学/不登校31.8%

→不登校のきっかけ 無気力30.1%

→中途退学の事由 もともと熱意がない16.6%

教育課程の弾力的な編成等

平成25年度入学生から学習指導要領の全面实施

- 義務教育段階の学習内容の確実な定着を図るための学習機会を設けることを促進
- 地域、学校及び生徒の実態、学科の特色等に応じ学校設定科目、学校設定教科を設定
- 学校や生徒の実態に応じ、個別やグループ別指導、教師の協力的な指導、学習内容の習熟の程度等に応じた弾力的な学級編成など個に応じた指導の充実
- 学習の遅れがちな生徒、障害のある生徒等については生徒の実態に応じ、指導内容や指導方法を工夫

中教審高等学校教育部会

課題認識

- ・多様な学習ニーズへの対応に係る課題認識
- ・高校教育の質保証に関する課題認識

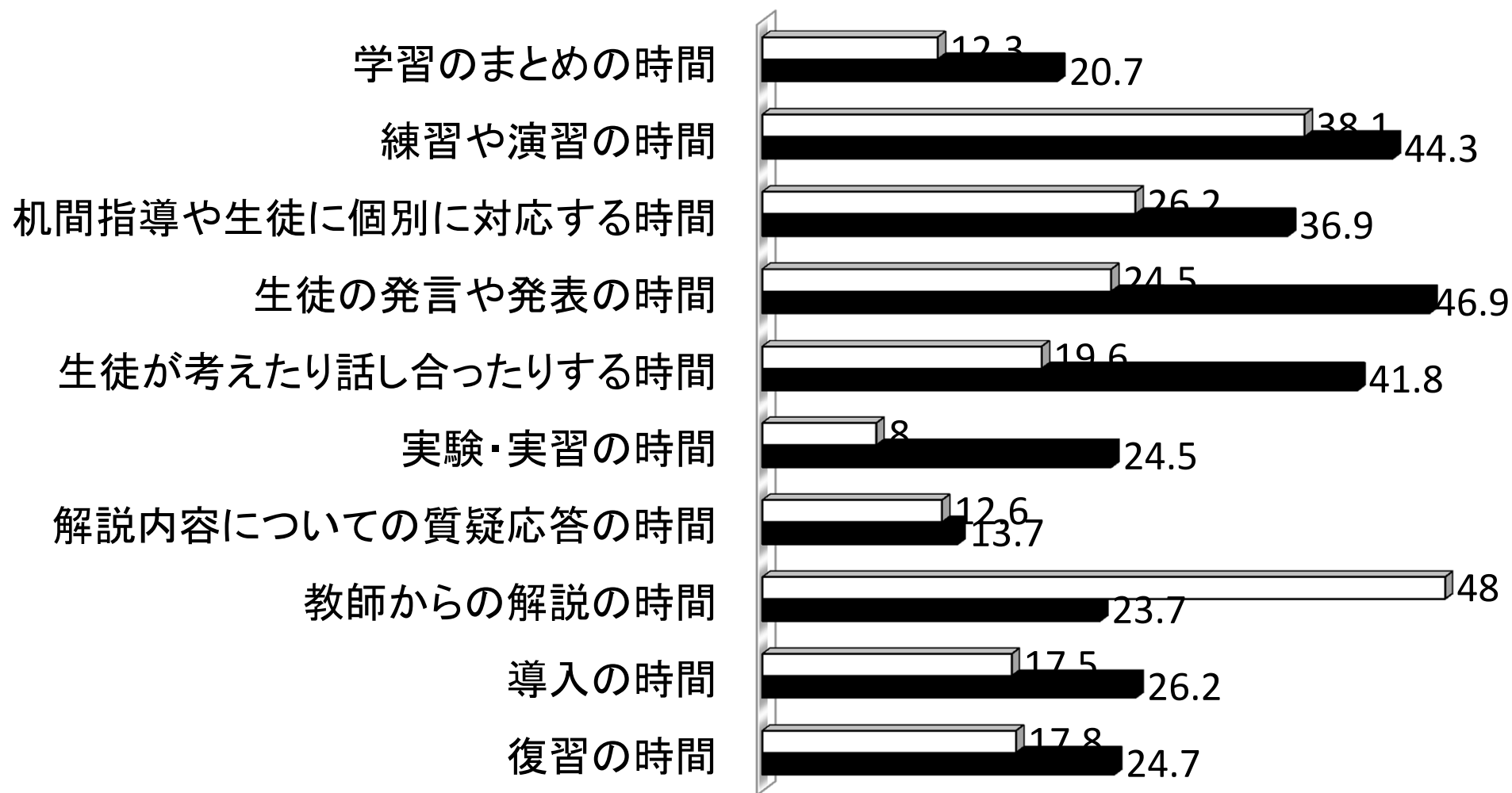
全ての生徒に共通に身に付けさせるべき資質・能力「コア」

- ・社会・職業への円滑な移行に必要な力
- ・市民性

高校教育の質保証に向けた評価の仕組み

- ・「コア」の評価
- ・基礎的・基本的な知識・技能と思考力・判断力・表現力等の評価
- ・その他の幅広い資質・能力の評価

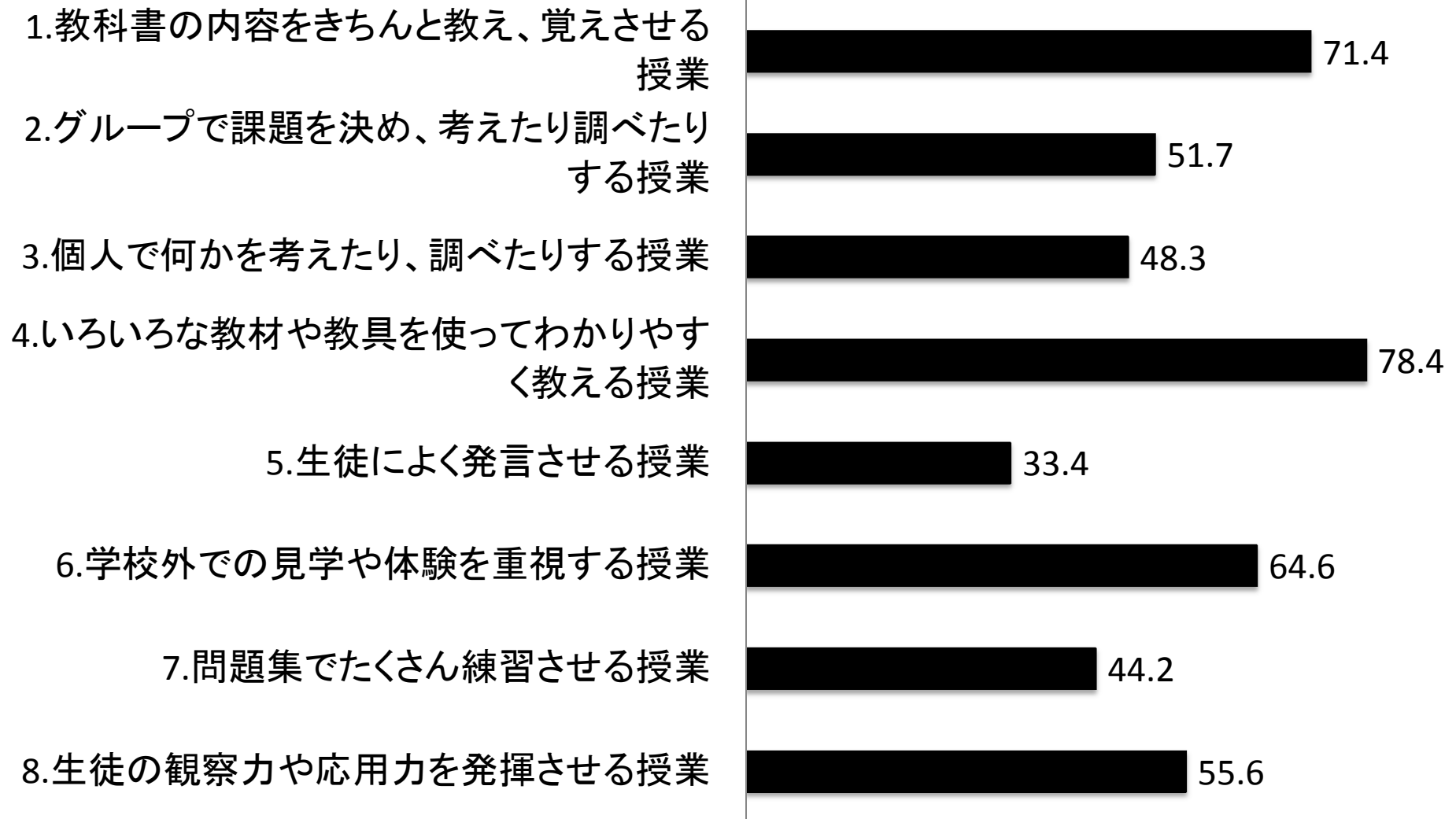
中学校と高等学校の授業の違い



□ 高等学校 ■ 中学校

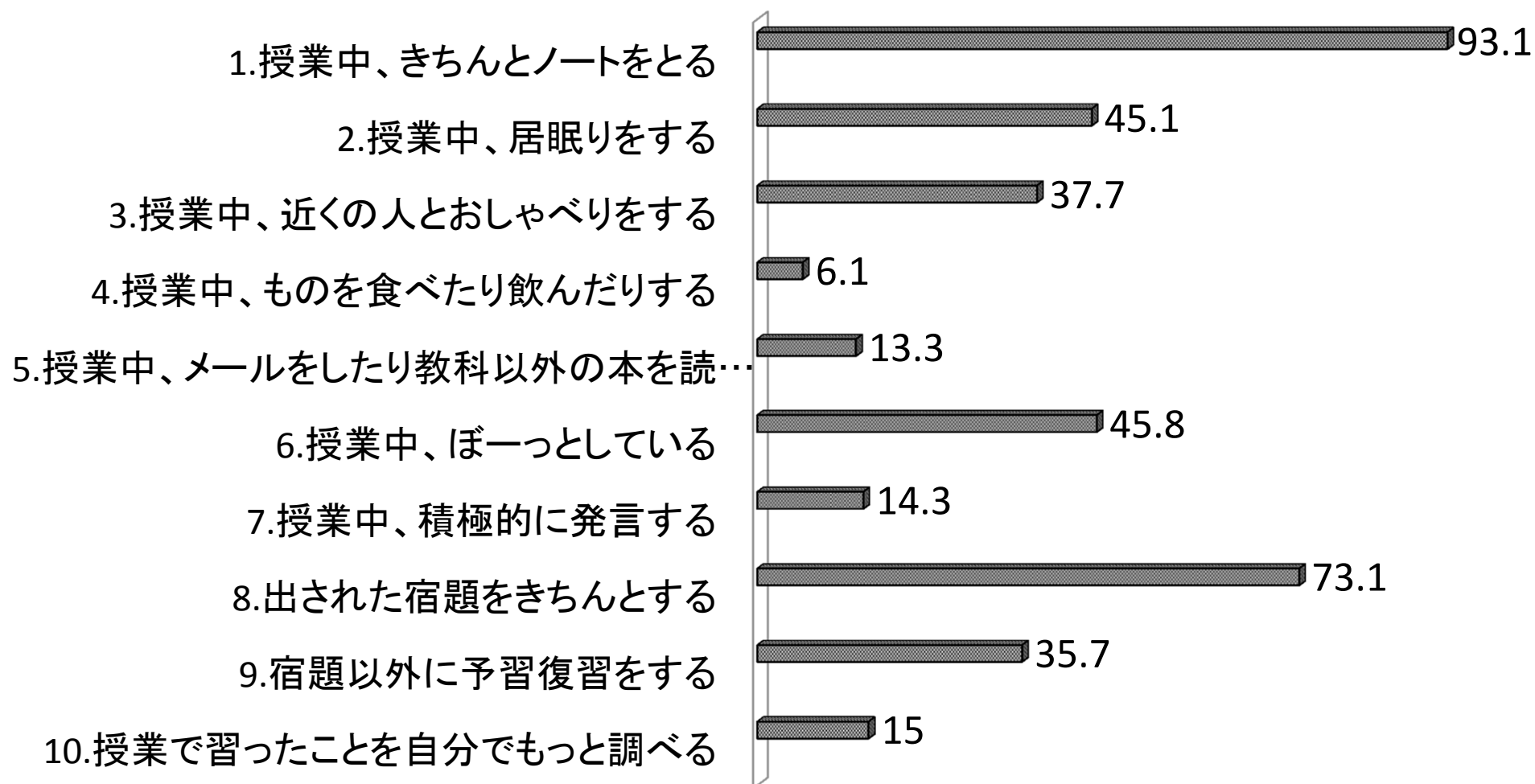
Benesse教育研究開発センター(2010)

どのような授業が好きですか



「高校生の勉強に関する調査(2010)
財団法人一ツ橋文芸教育振興協会、日本青少年研究所

次のようなことをしますか



「高校生の勉強に関する調査(2010)」

財団法人一ツ橋文芸教育振興協会、日本青少年研究所

研究協力校における実践研究

1. 授業における指導・支援

集団への支援、わかる授業づくり、授業研究会…

2. 特性に応じた個別的な指導・支援

発達障害、家庭環境、二次障害…

3. 心の育ちへの指導・支援

教育相談、生徒指導の関わり…

研究協力校6校(全日制普通科3校、全日制専門学科2校、定時制普通科1校)はいずれも学習面、生活面に課題を抱える生徒が多い高等学校
他校のモデルとなる特色のある取組をまとめた。

授業の中で工夫していること

○比較的多い回答

「生徒の反応をみながら授業を進めている」

「教科書やノートの準備を事前に伝えている」

「目標やねらいをわかりやすく伝えている」

「ノートに写す時間を十分に確保している」

○比較的少ない回答

「集中しやすい学習環境を工夫している」

「生徒同士が認め合う機会をつくっている」

「話の聞き方、発言の仕方のルールを明示している」

「生徒にわかりやすい具体的な評価をしている」

支援が必要な生徒への対応

○大切だと思うこと

「生徒の質問に応じたり、やりとりしたりする」

「クラスの状況に応じて授業の進め方を工夫する」

「生徒のことを日頃から職員間でよく話し合う」

「日常的に生徒とコミュニケーションをとる」

○実施できていないこと

「医療、福祉、行政などの専門機関の助言を得る」

「生徒の学習状況に応じて評価を工夫する」

「生徒理解や特別支援教育の研修会を実施する」

「指導で悩んだとき相談できる人や場が校内にある」

基礎学力と学び直し

「わからないところ」が「わからない」
指名されずにほっとする、質問ができない
考えずに「わかりません」と即答する
ノートの間違えはすぐに消し正解のみを書く

義務教育段階の学びの実態、学力の定着の確認
学び方(聞き方、話し方、書き方)を教える
学びのユニバーサルデザイン、教材の工夫
学校設定教科、設定科目の工夫……

言語・コミュニケーション能力

表現語彙が少ない

自分の感情をうまく言語表現できない

文章表現力が弱い

相互性のある会話にならない

1対1でないと話が聞けない

教師と生徒・学生のかかわり

生徒・学生同士のかかわり

誤学習してきた人間関係構築の修復

学び合うこと、支え合うこと

反対されること意見されることへの不安
間違えることへの不安

自分の発言に責任を持つことへの不安

教師にはわからない気持ちがあわからないが
生徒・学生同士ならわかる

教え合うことで自身の理解は深まる

チャムの関係からピアの関係の確立

自分の気持ちのメタ認知

自分は今どういう気持ちでいるのか
どんなときにこういう気持ちになりがちか
自分の気持ちの動きのパターン、傾向を知り
どのように対処すればよいかを考える

自分の気持ちのメタ認知ができなければ、
相手の気持ちを推し量ることは難しい
心の育ちを支える人と場の確保

生徒の発言に耳を傾ける

気持ちや考えをうまく話すことは難しい。
すぐに意見や分析をしないで聴く。
受け止めて話しやすい状況設定の必要性。

＜発言を促すために＞

待つ、ヒントを与える、友達を手がかりにする、
相づちを打つ、つなげる言葉かけをする、
感心する・ほめる、お礼を言う、
「わかりません」で終わらせない……

観点別評価という視点

「関心・意欲・態度」

情意的領域の達成・向上目標

「思考・判断・表現」

認知的領域の向上目標

「知識・理解」

認知的領域の達成目標

「技能」

精神運動的領域の達成目標

(Bloom, 梶田)

研究協力校の実践1

愛知県立高浜高等学校

生徒指導による学習規律、教材・教具の工夫
TTによる指導、教師の学び合い、授業研究会

栃木県立益子芳星高等学校

生徒の学び合い、プリント・テスト類の工夫、
習熟度別・少人数制、別室登校制度

神奈川県立綾瀬西高等学校

特親クラスの実践、学び直し、授業の構造化、
生徒との関係づくり、観点別評価

研究協力校の実践2

岩手県立遠野緑峰高等学校

授業改善、授業研究会、支援員・TTの活用、
習熟度別授業、観点別評価

北海道新十津川農業高等学校

習熟度別授業、少人数制授業、学び直し
教材の工夫、評価の工夫、教育相談

山形県立霞城学園高等学校

ユニバーサルデザイン、支援員の活用、
学び直し、教育相談、自立活動的な指導

現状の課題と大切にしたいポイント

①「実態把握」

教師が実施する「チェックリスト」等の他、生徒自身に調査を行っている場合もある。入学時に新入生全員に実施している学校もある。特定の生徒に障害があるかどうかではなく、対人関係や生活上の課題の把握のため、全員を対象とする場合が多い。

- (1) 生徒の多様なニーズの把握、教師のニーズ
- (2) 多様な方法の検討、早い段階の情報収集
- (3) 生徒の実態に関する教職員の共通理解
- (4) 保護者との連携・協力

②「組織・校内支援体制」

新たな組織をつくる学校もあるが、既存の生徒指導や教育相談の組織を活用する学校が多い。全校生徒の健康状態を把握している養護教諭の役割は大きく、SCやSSW等の外部支援者とのキーパーソンとなっている。課題を抱える生徒の多い学校は教員に必要感はあるが、いわゆる進学校は組織よりも個別的な対応が多い。

- (1) 活性化するためのキーパーソンの存在と動き
- (2) 教職員の意識向上と共通理解
- (3) 組織による校内支援体制の構築
- (4) 管理職の理解とリーダーシップ

③「教育課程・指導形態」

定時制や専門学科は教育課程の弾力的な編成が可能。学校設定科目・教科を工夫し学び直しをしたり、進学・就職コースを分け選択科目の幅を広げたりしているところもある。少人数制、TTによる指導はあるが、取り出しの個別指導は履修として認められていない。

- (1) 教師の教育観・指導観の共通認識
- (2) 生徒の支援ニーズに応じた工夫の必要感
- (3) 学校設定科目・教科の編成
- (4) 効果的で柔軟な指導形態の工夫

④「指導・支援」

進学校では個別対応が多く、課題を抱える生徒が多い学校では特定の生徒だけの支援体制はつくりにくい。教師主導型の授業が多いが、不登校生徒が多い学校などは、学び直しも取り入れた全体にわかる授業づくりの動きがある。心の育ちへの支援も重要である。

- (1) わかる授業と学び直しという観点
- (2) 教科を超えた教師の共通理解と支援の共有化
- (3) 授業改善と生徒の変容の共通理解
- (4) 個に応じた支援の工夫

⑤「学習評価」

大学等進学者が多く必修科目が多い高校では、学習評価に関して個々の教員に任される自由度は少ない。学習評価は生徒の学習意欲とも直結することから、試験成績、平常点の他、レポート等で評価の工夫をしている学校はある。しかし、取り組みやすいテストの工夫等は今後の課題である。

(1) 定期考査等での配慮と工夫

(2) 高校卒業資格としての評価の在り方

(3) 評定のための評価、指導改善のための評価

⑥「中高連携」

中学校からの情報提供が入試に影響するという危惧があり、試験前には情報が上がらない。入学決定後に高校側が中学校へ情報収集する場合もあるが、通学域が広いため十分に収集しきれていない。都道府県によっては、大学入試センターの配慮が高校入試にも取り入れられてきている。

- (1) 中高の効果的な情報共有のシステム化
- (2) 個別の指導計画などの積極的活用
- (3) 高校入試のガイドラインの作成

⑦「キャリア教育・進路指導」

定時制や専門学科に比べ、全体の70%が進学している普通科高校では、生徒に必要な職業観、勤労観を育てる意識が教員にも薄い。企業との連携の他、ハローワーク、障害者職業センター、特別支援学校などとの連携による幅広い情報収集が必要になってきている。

- (1) 自己理解と適性に応じた将来設計
- (2) 職業観や勤労観を育てる教師の姿勢
- (3) 個別の教育支援計画の積極的な活用
- (4) 就労に関する専門機関との連携

大切にしたいポイント

- (1) 早い段階での生徒の支援ニーズの把握
- (2) 教職員間で生徒の情報の共有化
- (3) 生徒のニーズと教師の教育観・指導観
- (4) 問題解決能力(失敗を成功に変える経験)
- (5) 自己理解と特性に応じた将来設計
- (6) 職業観、勤労観を育てる意識
- (7) 就労に関する専門機関との連携
- (8) 授業のつながり、課外のつながり